

2018・03・20@内閣府

移住促進、倉敷での民間の取り組みと課題(予定発言要旨)

倉敷・大原美術館 大原謙一郎

(倉敷は、道路、鉄道等のインフラの面でも、歴史遺産と文化活動の面でも、医療、教育等の生活基盤の面でも、例外的と言えるほど恵まれていることを前提に報告したい)

(1) 倉敷の民間の取り組み

- ・美術館、コンサート、景観整備、夜間のライトアップ、などの基盤の上に、屏風祭、花七夕、フォトミューラル、ジャズストリート、などのイベントを連続させた
- ・「倉敷には面白いことがある、ここで面白い仕事ができる」というイメージが形成された
- ・観光客等訪問者が増加し、ビジネスチャンスが生まれ、個性ある商店が相次いで進出した
- ・行政による子育て支援などの多くの施策との相乗効果で人口は増加し、新設マンションが多く建ち、美術館でも小学生関連のプロジェクトの参加者が増え、移住が進んでいることが実感できるようになった

(2) 新しい課題の顕在化

- ・新しく進出した商業施設や商業者の大部分は、倉敷の歴史、文化、風土を理解し、倉敷への愛情を持って仕事に取り組んだが、その中のほんの一部に、地元の歴史、文化、伝統、アイデンティティーと調和しにくいと思われるものも見え始め、「倉敷らしさが失われる」という声が聞かれるようになった

(3) 強靱なアイデンティティーを持つことによる克服の試み

- ・市民の中に、「街の景観保全や商業活動の節度への協調は要求するが、排除の論理は働かせない」という配慮があり、「それでも倉敷らしさが失われないように、自ら強靱なアイデンティティーを持つよう試みる」という機運が生まれた
- ・行政とタイアップして、倉敷のアイデンティティーに沿う施設(林源十郎商店、奈良萬小路、倉敷クラフトワークビレッジなど)をオープンさせ、同時に、大学や学生とタイアップした「COC事業」も展開している
- ・高梁川流域学校、備中倉敷学講座、倉敷南高校の「町衆プロジェクト」、など、倉敷の歴史と文化とアイデンティティーを再確認する企画が相次いで生まれた
- ・「倉敷町家トラスト」、「倉敷伝建地区を守り育てる会」、などの市民活動が生まれ、行政と連動して街の雰囲気を守るために活動している
- ・四月には、新しい知的センターを目指す民間事業として、「語らい座・大原本邸」が開館する
- ・隣町総社市の外国ワーカーの受容と、町の歴史、文化、アイデンティティー再発見の活動

(4) 評価と希望

- ・倉敷の、「強靱な地域アイデンティティーを持つことにより、商業誘致や移住促進と、地域のアイデンティティーの保全を両立させる」という試みがどこまで実を結ぶかは今後の課題だが、ここまで来ることが出来たのは、「努力一割、知恵一割、幸運八割」ではなかったかと思う
- ・日本全国の地域で、移住者を受け入れつつ地域のアイデンティティーが保たれ、全国に数多くの「美しく価値ある、世界一流の地方」が育つよう、あまり幸運でない地域にも光が当てられるよう希望したい。

以上